

結核組織ヲ染色シテ結核菌ノ検査ヲ施ストハ正  
規ノ形狀ヲ有スル菌ノ他ニ結核菌ト同一ノ著色  
反應ヲ呈スル同形ノ小體アリ佛國ニテハ之ヲ  
Bergey's 稱ス軟膜膜ノ結核、腺病家ノ腫大  
セル淋巴腺、肺結核空洞壁ノ切片ニ於テハ時々  
視ル處ナリ之ノ結核菌ト同一ノ染色反應ヲ呈ス  
ル小圓形ハ即チシロウ氏囊或ハこるねト氏  
芽胞ト稱スルモノニ之ヲ結核菌ノ變形態ノ一  
ト見做サ、ル、ナリ

而シテ結核菌ハ培養基ニテ變態シ又動物體殊ニ  
鳥ニ於テ其形態ヲ變化ス之ヲ黃色變態ト稱ス之  
ノ變性ハ人及牛ニ殆ト見ルコトナシ人體ニ於テ菌  
ノ變態ハ結核菌ノ漸次吸收セラレテ變形スル機

兒氣管支加答兒アリ結核菌有無ノ鑑定ヲ依嚙セ  
ラレシニ痰中ニ多數ノシロウ氏囊ト認ムニキ  
小體アリ其一分ヲ取り沈澱検査ヲ施スモ正規ノ  
結核菌ヲ見出スコトヲ得ズ

之ノシロウ氏囊ハ確ニ結核菌ヨリ來ルモノナ  
ルヤ結核細胞ノ變化ノ著色法ニ對シ同一ノ反應  
ヲ呈スルモノナルヤ疑ナキ能ハス然レモ結核膿  
及切片ニ就テ檢査スルニ細胞ノ成形原中ニ結核菌  
ノ多數密集シテ之ノ變化ヲ來ス如キ所アルノミ  
ナラス陳久培養ニ於テ類似ノ變態ヲ來ス點ヨリ  
考察セバ結核菌ノ變化シテ生スルモノト斷定ス  
ルヲ穩當ト認ムルナリ而シテ此ノ小體ヲ目シテ結  
核菌ノ睡眠狀態ニ陥リ久ク種子ヲ永續スルモノ  
トハ速斷シ難ク或ハ全ク變質シテ感染力全ク消

轉即チ結核菌ハ顆粒顯著トナリ濃ク著色スル顆  
粒ノ部分久シク遺存シ著色セザル部分ヨリ崩壞  
スル機轉ト(上記ノ黃色變性ニ對スルノ黑色變  
質ト稱スベキ變性ヲ呈ス)之ノシロウ氏囊ニ  
化スル機轉アリ

氏ハシロウ氏囊ハ(前)もるもつニ就テ觀ルル  
極テ罕レナリ然レモ時トシテ之ヲ觀ルルコトアリ而  
シテ其直徑ニみくらんニ過キサルカ大ニシテ長徑  
十みくらん幅徑六みくらんニシテるるり氏  
染色及ちしる氏染色法ニテ染色スル系ハ結核菌  
ト同一ニ着染スルモ彼ハ稍シ濃厚ナルモノナリ  
(一)ハ二十八年ノ一婦人腎臟結核症ノ尿中ニ現  
出セル乾酪塊中ニ發見セル者ニシテ其數極テ夥ク  
之ニ反シ正規ノ結核菌ハ極テ稀シ(二)十歳ノ女

失スルモノナルヤ知ルベカラズ此ノシロウ氏  
小體ハ上記ノ如ク結核菌ト併存スルコト多キモ該  
小體而已發見シ正規菌ヲ見出スコト類ル困難ナル  
コトアリ故ニ此ノ小體ヲ檢出スルモノハ先テ正規菌  
ノ檢出ヲ勉ムベク正規菌ヲ發見セザルモノ十分ニ  
結核ノ疑念ヲ抱クニ足ルヘキモノ、如シ故ニ診  
斷上ニ於テ參照ノ價值アリト考フルコトヲ得ルモ  
ノナリト

時 報

◎學位授與

曩日醫學博士ノ學位を授與せられたる遠山椿吉  
氏の學位記並ニ提出論文の題目左の如し

學位記

東京府平民

遠山 椿吉

右論文を提出して學位を請求し東京帝國大學醫科大學教授會に於て其大學院に入り定規の試験を經たる者と同等以上の學力ありと認めたり仍て明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第二條に依り茲に醫學博士の學位を授く

提出論文の題目

ペスト菌の東京に於ける冬期寒氣に對する抵抗

抵抗力に就て(獨逸文)

家鼠の病的菌(獨逸文)

虎列拉患者の糞便中「コムマ」菌の現存目數に

就て(邦文)

コレラ患者の吐及瀉物中に發見せる纖細スピ

ルレン(邦文)

非コレラ患者便中の纖細スピルレンに就て

(邦文)

回歸熱スピルレンの形態に就て(邦文)

毒染バチルルス(邦文)

實扶的里亞菌の形態に就て(邦文)

分枝ある結核菌に就て(邦文)

多數なる人の群集する場所に於ける結核菌の

證明(獨逸文)

續泉の殺菌力に就て(邦文)

消毒藥液中に於ける動物死體に含有する黴菌

は幾時間にして其生活を失ふや(獨逸文)

遠山博士論文審査の要旨

ペスト菌の東京に於ける冬期寒氣に對する

抵抗力に就て(獨逸文)

著者は最初に諸學者の病的菌を寒冷に逢はしめ其抵抗力を檢査したる數多のワテラツトルを掲げ次に千八百九十九年に大阪に於けるペスト流行の際培養したるペスト菌培養を東京市に於て冬期二箇月間寒氣に逢はしめ日々に最高最低の氣温を計り屢々該菌の發育狀態並に毒性を檢査し且つ一方には同一のペスト菌培養を解凍内に置き比較檢査を行ひたるに左の成績を得たり蓋し其試驗中には於ける氣温の最高は二〇最低零下二・五なりし

一 零下二・五度の寒氣に逢はしめたるペス

ト菌は其毒性を保有すること解凍に置けるものより強かりし

二 又最高温度の二〇度に逢はしめたること

三箇月なるも毒性を變せず之に反して解凍に置きたるものは五十六日にして著しく毒性を減じ八十四日にして甚しく毒性を減却せり

三 冬寒に逢はしめたるペスト菌は繁殖力弱しと雖後には解凍のものより反て強し又老廢形を生ずること解凍のものより少し

家鼠の病的菌(獨逸文)

家鼠は人の住居する場所に生息するを以て其傳染病と人の傳染病との關係を研究するは甚だ重要なりとす是れ一は人體の疾病との關係二には人體病原と動物病原の區別三には該病毒

を以て家鼠を驅除する如何に在り而して家鼠の  
ペスト病蔓延に大關係を有するは家鼠疾病の研  
究に由りて其知識を増進せしめざるべからざる  
なり

著者は千九百年大阪神戸にペスト流行するに際  
し東京に於ける友人田中某より一頭の斃鼠を得  
て之を解剖し其内臓血液を検査したるに一種の  
微菌あるを發見し續て其菌の培養及び動物試験  
を行ひたるに南京鼠殊に家鼠には甚しく毒性あ  
りて其斃鼠の病原なるべきを確定せり而して尙  
該菌の形狀培養基に發育せる模樣且動物に呈す  
る症狀を詳細に記載せり然るに其後に至り著者  
自ら多數の家鼠を捕獲したるに其家鼠中にも亦  
三頭の病鼠あり其斃れたるもの並に他の友人より

り更に一頭の斃鼠を得て皆之を検査したるに解  
剖的變化顯微鏡下に培養上の所見ペストに於け  
る如く鼠蹠腺脾臟肝臟等の腫起あり諸内臓並に  
血液に前斃鼠に於けると同一の微菌あり且つ其  
菌を培養し多數の動物試験をなしたるに十五頭  
の南京鼠は九頭斃れ天竺鼠は病狀を呈せざりし  
が八頭の家鼠に就き該菌を或は皮下に注射し或  
は食物に混じりて與へたるに注射せるものは十四時  
間乃至五日にして斃れ飼養したるものは一日半  
より五十三日にして斃れ其斃鼠の淋巴腺諸内臓  
心臓血液にも該菌を發見せり著者は其微菌の形  
態上培養上に於て既に人の斃鼠に發見したる病  
的菌即ちエルサン及リヨフレル氏鼠蹠腺扶斯菌と  
異なる點を明記せり

虎列刺患者の發便中コムマ菌の現存日數に  
就て

此試験は患者の便中無菌となるの時期を定むる  
爲になしたるものにして著者は恢復期に於て下  
劑を與へたるものと與へざるものとを對照せし  
に其自然の經過を待ちたる者百三十五名に於て  
は便中無菌に至れる日數發病後平均一五・七五  
日止瀉後より算して一〇、九九日なりし又下劑  
を與へたるもの百八十名に於ては發病後より起  
算し一五、八四下劑與後五、八二止瀉後九、七三  
日なりし

又最長及最短日數を比較すれば自然の經過に任  
せしものによりては發病後無菌迄最長四十五日  
最短三日止瀉後最長四十二日最短二日甘汞を投

じ下劑を起せしものにありては發病後最長卅一  
日最短三日止瀉後最長廿九日最短一日  
故に虎列刺恢復期にある患者の大便秘速に菌を  
除かんと欲せば下劑を與ふるを善しとす尙便中  
微菌の存在如何は男女の性及び吐瀉期の長短に  
關せずと雖年齢の進むに従ひ微菌を捕獲するの  
力減じ重症のものは却て輕症のものに比し早き  
ことあり

コレラ患者の吐及瀉物中に發見せる纖維素  
ビルレン(邦文)

著者は首めに諸學者のコレラ吐瀉物中にスピル  
レン存在を唱へたる説を掲げ明治二十八年東京  
市のコレラ流行に於て自ら多數のコレラ患者に  
就き實驗したる成績を詳記し以てムーデンコト

氏の説に反對し虎列刺流行の初期にも亦該スビルレンを發見すべく且該スビルレンは兩端尖鋭に終り之を以て一見容易に區別し得へしとなせり又該菌はコレラ患者の吐物中にも往々發見せりと云へり

非コレラ患者便中の纖維スビルレンに就て  
(邦文)

著者は纖維スビルレンに就て既に二回の報告をなしたるは虎列刺流行時にして該スビルレンの虎列刺患者との關係如何の問題を確定せざりしかコレラ病の流行せざる時に當り毫も該病と關係を有せざるインフルエンツアの一患者竝に腸空扶斯の一患者の便より甲には下劑を用ひたる後乙には之を用ひずして其大便を檢査したるに

右兩患者にも亦虎列刺患者に見たる纖維スビルレンと同一のもの多數あるを發見せり之に據りて以て彼のスビルレンはコレラ患者に特有なりと唱ふる諸學者の説の當を得ざるを論難し纖維スビルレンは下痢症の原因にあらず從てコレラ病の疑あるものに之を發見するも同病の診斷上毫も關係を有するものにあらず又該スビルレンは健康人の大便中に之を發見せりと

回歸熱スビルレンの形態に就て(邦文)

本病流行の際患者の血液を懸滴又は乾燥標本となして檢査し菌體の形狀大小等に數多の種別ありて從來記載せる所にては未だ盡さる所あるを述べたり

萐菜バチルルス(邦文)

嘗て醫學博士緒方正規の專案に發見したるコムマバチルルスに就き其純培養をなし其菌の形態竝に培養狀態に就き詳密の研究をなし且つ數多の動物試驗をなし以て醫學博士緒方正規の説の如く虎列刺菌と其コムマ菌は全然別種なるを論述せり

實扶的里亞菌の形態に就て(邦文)

著者は最初に微菌形態に就きコロン、コッホ氏等の不變説とネグリー、ピルロト氏等の多形説とを掲げたる後一定微菌の變形は或る範圍内に止まるを以て他菌と區別し得べきを論じ曩に著者の發見したる結核菌分枝に就き實例を述べ續て實扶的里亞菌に就て形態上變化あるの檢査成績に論及せり即ち著者は該菌に就き既に學者の

發見せる分枝竝に極粒に就き其檢査の方法を記し且自ら鏡檢したる實扶的里亞菌形狀を圖に現はし未だ人の記載せざる該菌の放線狀配例(ドルーゼ)に酷似せるもの偉大なる嚙狀形成連鎖狀長線狀に嚙狀の連續竝に莢膜等あるを發見し以て實扶的里亞菌系統類別のことに論及し著者は實扶的里亞はジェルシュニツト氏の放線狀菌實扶的里亞同屬の説に賛成せしレトマン氏等の絲狀菌説分類に一致すと云へり

分枝ある結核菌に就て(邦文)

著者は最初に二三病的菌に分枝ある説のリテラツールを掲げ次に一千八百八十七年にノカル及ヒリウニ氏の結核菌に分枝を發見せる説竝にメチュニコフ氏等其説を證明したるのみならず該

菌に小畜を發見したる説且レーマン氏著者には結核菌を絲狀菌の一類たるミコバクテリア一科中に類入したることを詳記し明治三十年未だ本邦人の結核菌分枝報告あらざるに先ち一患者に就て結核菌に分枝あるを發見し反復其喀痰を數回検査し以て先人の所見と比較して其異同を論じ續て該菌に發見せるワタアレン(空點)竝に小畜に就き研究したる成績を圖に現はし又該患者の病歴を附記したるか爾來尙其研究をなせるに他の二結核患者にも亦分枝菌あるを確定したりと

多數なる人の群集する場所に於ける結核菌の證明

結核に罹り死亡するものゝ多きは人の知る所な

るか如何に人の周圍に該病毒の蔓延するやを知るは重要な事にして之に關し學者の既に研究したる成績即ちボリシゲル、コルネット、ブリュンダ氏の説を掲げ著者は自ら東京市に於ける諸停車場學校公園劇場役所竝に市街道路に嚙出せる痰唾を一定の方法にて之を集め都合三百七十八箇所に於て採取したる痰唾に就き結核菌の有無を検査したる二十二回即ち五、八二%には結核菌あるを發見せり故に其成績によりて人民群集の場所に甚しく結核病毒の蔓延すること竝に其嚙痰を一定の方法により消毒せざるべからずと論述せり

鑛泉の殺菌力に就て(邦文)

著者の郷里山形縣南村山郡掘内村大字高橋の酢

川温泉は多量の硫酸を含む硫黄泉なり著者は之を取り來りて消毒力の試験を爲せり先づ泉中に微菌を含むや否やを見んか爲めに之を培養基に注加せしに微菌の發育なし次に種々の菌に就き試験せしに脾脱疽菌芽胞は五日間浸したるもの迄は動物を斃し十日間に至れば之を斃すの力を失ひたり虎列刺菌は五分時腸室扶斯菌及び膿膜スタセロコクセンは三分以上にして發育せず十倍の鹽泉濃至溶液は三分以上にして虎列刺腸室扶斯及實扶的里亞菌の生活を滅却す故に酸性鹽泉は廉價なる消毒薬として流行病に際し用ふるを得れとも唯金屬及び土類にて製したる部分に用ゆるを得ざるの不便あり

消毒薬液中に於ける動物屍體に含有する微

菌は幾時間にして其生活を失ふや(獨逸文)

此問題はベスト流行時に於てベスト斃鼠を消毒薬液に投入し該菌の生存幾時なるやを知るは殊に重要なり蓋し斃死せる動物に於て病毒の生存如何は其動物の大小と消毒薬の種類竝に可檢菌の抵抗力如何に關するは論を俟たされとも炭疽熱菌を以てなせる動物試験は之をベスト菌の試験に比すべきを以て著者は東京に於てベスト流行時に當り炭疽熱菌を南京鼠に接種し其斃死せるものを他の藥品を混せざる四プロセントの石炭酸水中に入れ一定時毎に其諸内臟より微菌を採取し數多の培養竝に動物試験を行ひたるに其成績は之を五表に現はしたるか其試験成績によりて左の結論をなせり

一 八乃至九、五五の重量を有する南京鼠

の内臓に含有する炭疽熱バチルスは四  
%の石炭酸水中に於て十時間以上にあ  
らざれば死滅せず

二 該菌毒性は内臓固有の色澤粒に其他の  
性質變化と共に消失す

三 右の試験によりて南京鼠より大なる家  
鼠野鼠にありては四プロセントの石炭  
水中に投入するも其内臓に消毒薬の侵  
入するには彼れよりも尙多くの時間を  
要すべしと

以上論文は孰も學術上有益にして遠山椿吉は醫  
學博士の學位を授與せらるべき資格を有するも  
のと認定す

◎得學位祝賀會

榎順次郎、朝倉文三、遠山椿吉の三氏論文を提出  
し醫學博士の學位を得られたるにつき三氏の同  
窓諸氏發起となり去る七日龜島町借樂園に於て  
開かれたり、此日出席者は各自筆を以て三冊の  
名簿を認めて之を三博士に呈し發起人の祝詞三  
博士の謝辭あり來會者九十餘名頗る盛會なりき  
といふ

◎報恩會兼博士祝賀會

衛生學教室出身者及同教室に縁故ある人々相談  
り恩師緒方博士及同窓出身者にして今回博士號  
を受領せる遠山(醫學)仁田(獸醫)の兩博士を聘  
し去十一月十八日午後二時衛生學教室附屬ベス  
ト研究室前にて一同攝影し同四時山の上の集會

所にて報恩兼祝賀會を催されたり發起人總代と  
して今村助教授開會の辭を述べ次て野田忠廣氏  
之に和し次て恩師緒方博士の謝詞及我教室出身  
者にて遠山仁田二氏の博士となられたるは予の  
尤も満足する處にして殊に遠山氏は民間に在り  
獨力洋行もせず博士の學位を得たるは極めて稀  
有なることに必竟氏の不桡不屈の精神にて十  
年一日の如く研鑽せられたる效果なりと賞揚せ  
られたり

遠山氏は立て曰く不肖本日御招待を蒙り深く光  
榮とする所にして又厚く感謝す尙ほ本日來會せ  
られし諸君の厚意を永久忘れざる爲め紀念とし  
て保存する目的故各位等にて之を手帳に記名せ  
られたしと述べ更に身は大學別科を出て間もな

く負債の爲め一旦郷里にて閉業或は醫學學校の教  
授をなし稍よ蓄財し得たるを以て再び東上し衛  
生學教室に入り緒方博士の指導の下に研究をな  
し爾後微力漸くして小研究室を設立し研鑽する  
こと十數年今日博士の榮譽を得たるは偏に恩師  
緒方博士の懇篤なる訓陶庇護と先輩諸氏の誘導  
に由れるなり而して余は此の海深く山高き先生  
の恩恵に懐ゆるの道を知らざるなり只今後益々  
奮勵博士號を消極的に耻しめざるに止らず進て  
之を發揮し以て鴻恩萬分の一に答へんとす先生  
之を諒せられよと述べられ次に仁田博士の謝詞  
最後石原學士之研究室職員の移動及研究、撰科生  
等を報告せられ其れより宴會に移り散會せしは  
九時なりき